この本を薦めます

学会誌前編集委員長 佐々木 葉

第23回（最終回）

佐々木 葉

正会員　早稲田大学 教授
前学会誌編集委員会 委員長

2年に渡ったこの連載の最終回は、聞き手を務めてきた佐々木がこれまでを振り返りながら、しみじみする小説3冊を選びました。

2013年1月号から22人の方に69冊の本を紹介いただいた。毎回の取材は、わずか900字ではとてもお伝えできない貴重な時間であった。それぞれの本の内容だけでなく、22人の皆様の本に託された熱く、深い思いや論考に触れられたことは、役得以外の何者でもない。69冊は、新書に代表される論説が最も多く、次いでドキュメンタリー、歴史、自然科学、都市論、研究書、小説、エッセイ、古典と幅広い。

SASAKI Yoh

1961年鎌倉生まれ。早稲田大学建築学科卒・東京工業大学大学院修了。現職は5つ目の職場。NPO郡上八幡水の学校副理事長。2012年6月から2年間学会誌編集委員長をつとめる。写真は、この連載で皆さんにお薦めいただいた本の一部とともに。

すでに読んでいた本はごく一部であり、この取材がなければ読まなかったであろうさまざまな本と接することができた。同時に本へのスタンスも、自分の原点、刺激、啓発、応援、共感とさまざまであることにも気づかされた。

さて、こうした紹介を経た最終回で自分は何を薦めようか。あれこれ考えた結果、好きな小説から選ぶこととした。まずは奥田英朗。エンタメ的なものも多いが、私が好むのは登場人物が生きる社会へのしっかりとした観察がある長編である。そのなかから『オリンピックの身代金』を挙げる。先の東京オリンピックの開幕にむけて建設ラッシュで変貌する東京と同時代の地方。もはや忘れ去られつつある社会の構図がストーリーの背景にしっかりと見える。

ついでポール・オースターの『ブルックリン・フォーリーズ』。著者はアメリカで大人気の作家、翻訳者も著名な東大教授であることなど何も知らずに、たまたま本屋で手に取った。以来オースターの作品はほぼすべて読んだが、やはり最初に出会ったこの本が好きだ。登場人物はみな欠点や問題を抱えながらも愛に満ちている。そして、人は街とともに生きていること、ブルックリンという街の魅力の本質が、ひしひしと伝わってくる。

最後はこれも本屋で出会った『おこまの大冒険』。猫好きな歌川国芳が挿絵を描き、山東京山が物語をつづった江戸時代の連続小説『朧月猫の草紙』を大胆に編集した素敵な本である。メス猫おこまがあちこちの家に飼われていく一代冒険記であり、わくわくどきどきしながら一気に読んでしまった。読み終わった瞬間、江戸の人たちがこの草紙について語り、連載の次を心待ちにしている様子がありありと浮かんできた。人の世の楽しみの普遍性。同時に編集という力のすごさも。

結局は一人ひとりの人間の喜怒哀楽が人生である。そういう人生の舞台を私たちはつくっているのだということを、私は小説を読むたびに実感し、自らの仕事を振り返ったりするのである。

オリンピックの身代金
奥田英朗：角川文庫

ブルックリン・フォーリーズ
ポール・オースター：新潮社

おこまの大冒険
山東京山・歌川国芳：パイ・インターナショナル